實業補習讀本 卷二

375.9
Bu14
資料室

30387
教科書文庫
3
810
44-1902
~~20000~~
~~35834~~
M35
1902
2000
302706

資料室
375.9
Bu14

實業補習讀本

廣島大學圖書之印
廣島大學教
35834
圖書

巻二目次

第一　秋の農家　一
第二　近世の老農　三
第三　地味の改良　五
第四　野菜ト果實　六
第五　牧畜　七
第六　遠足　九
第七　手紙　旅立の人に送る文　同返事　一〇
第八　飛魚　一一
第九　須磨　一三
第十　熊谷と敦盛　一四
第十一　天津城の攻撃　其の一　一六
第十二　天津城の攻撃　其の二　一八
第十三　赤十字社　二〇
第十四　怪我ノ手當　二二
第十五　手紙　看病見舞の文　二四
第十六　河の力　二五
第十七　雨の恵　二七
第十八　汽車　二九
第十九　蒸氣機械の發明者　三〇
第二十　大名と鎧師　三二
第二十一　刀劍　三三
第二十二　市町村　三五
第二十三　歌　日本刀　三七

廣島大學圖書之印

實業補習讀本卷二

第一　秋の農家

二百十日・二百二十日とて、農家の心配せし日も、おだやかに過ぎぬれば、稲穂は、ますゝ頭おもげに垂れかゝりて、人々の元氣は、いよいよあがりぬ。田の面、漸く色づきゆけば、農家の人々は、たゞちに、これを黄金の色と眺めつべし。されば、今年の鎮守祭は、大鼓の音もいさましく、供へ物もまた多し。

秋祭も、めでたくをはれば、朝とくより、稲刈らんとて出で行く人多く、田畑の間は、漸く賑へり。

二人三人うちそろひて、稲刈る者あり。

これを馬につけ、田舟につみて、運ぶ者あり。廣庭にて、稻こきに掛けて、籾をこき取る者あり。その籾を、唐臼にてする者あり。唐箕にて吹きわくる者あり。俵につめ、繩をかけて、運ぶ者あり。實に忙はしきは、秋の農家なり」。

稻のとり入れと前後して、畑よりは、粟・もろこし・大豆・小豆をとり入れ、また、菜・大根・にんじん・ごぼーなどを收むるに、猶ほ多くの働きを要す。

一年の間、寒暑をいとはず、雨にさらされ、風にふかれて、骨をりししるしは、秋に至りて、あらはるゝものなれば、秋は、農家にとりては、最もたのしく、よろこばしき時なり。

我が全國の、米のとり上げ高は、四千萬石にのぼり、其の價は、大凡四億餘圓の多きに達すれば、農家の喜と憂とは、やがて、我が日本國の、喜とも憂ともなるものなり。

第二　近世の老農

近世の老農にて最も優れたるは、船津傳次平なり。此の人は、上野國富士見村に生れ、幼時より、農事に志篤く、また其の餘暇には、讀書算術・習字を學びて、聊か怠ることなかりき。

されば、成長して、名聲大に揚がり、村民等推して大總代名主たらしめしに、よく其の職にかなひて、全村の幸福を進めたり。時の內務卿大久保利通、其の名を聞き、駒場農學校の農場監督に擧げて、全國の農業を改良すべきことを勸めしかば、傳次平感奮して、これに從事したりき。

駒場野は、土地甚だ荒れたる所なりしに、遂に開墾の功を竣へて、よく今日の如くな

らしめしは、實に傳次平の功績なり。

駒場野や開きのこりの轡虫

とは、傳次平の俳句なり。これにて、駒場野當時の狀を想ふべし。

傳次平は、其の後、農商務省に入り、更に農事試驗場に轉じ、遂に技師となり、正七位に叙せられ、藍綬褒章を受けたり。老年に及び、職を辭して故郷に歸りしが、なほ農事に勉めて怠らざりき。實に實業界の偉人といふべし。

第三　地味の改良

地味の改良法は、種々ありますが、客土法と燒土法とが、其の重なものでありませう。

客土法といふのは、改良しようとする土壤に、それと性質の異なった土壤を混ずるのであります。例へば、粘土質の土壤には、砂土のよーなものを混じ、砂礫の多い土壤には、粘土などを加へるのであります。但し、その土壤

が、上層と下層と性質を異にして居ます所では、此の兩層をよく混じさへすれば、それで、改良の目的は遂げられます。

砂土を混ずるには、季節を擇びませんけれど、粘土は、秋冬の候に、田畑へ持ち出し、霜雪にさらして、粉のよーに碎けたのを、春になってから混ずるのが、善いと申します。

燒土法は、改良すべき地面を、二三寸削り取り、それに藁のよーなものをまぜて、十分に燒き、その燒土を撒布して、混ずるのであります。此の法は、其の土壤の養分を増し、雜草の根や種子を枯らし、害虫や其の卵などを殺し、有害物を無害物とする功がございます。

第四　野菜ト果實

果實・野菜ハ、氣候ニ關係アルコト言フマデモ無ケレド、地味ニ由リテ、大ニ其ノ成育ヲ異ニス。但シ、其ノ種子ニモ由ルモノナリ。

大根ヲ見ヨ。大隅ニ産スル櫻島ノ大根ハ、甚ダ大キクシテ、直徑一尺ニ及ブモノ少カラズ。コレニ反シテ、守口大根ハ、其ノ細サ指ホドニ過ギザルナリ。

葱ハ、白キ莖ニ青キ葉アリテ、莖ト葉ト倶ニ食スルガ普通ナリ。然ルニ、或ル地方ニ産スル葱ハ、白莖一尺ニ餘リテ、其ノ味ハ美ナレドモ、青葉ハ、硬クシテ食シガタシ。西洋種ノ葱ハ、其ノ莖圓クシテ球ノ如シ。コレヲ球葱ト名ヅク。「日本ノ葱ニハ球ナシ」トイヒテ、外國人ハ、コレヲ一奇トス。

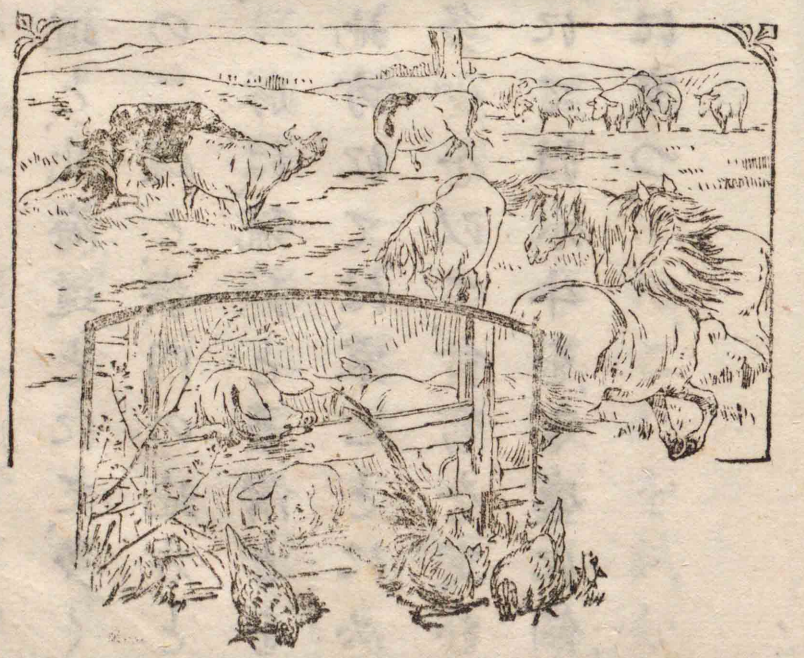
蜜柑ノ如キハ、種類ニ由リテ、大小同ジカラズ。夏蜜柑ニハ、頗ル巨大ナルモノアリ。柑子蜜柑ハ、甚ダ小ナリ。

林檎モ、マタ然リ。近年、東北諸國ニ産スル米國種ノ林檎ハ、甚ダ大キクシテ、其ノ外皮ノ色モ亦異ナリ。

第五　牧畜

人の生活に要する物品は、其の原料を動物より得るもの多し。ことに、家畜は、人生に最も効用多きものなり。其の一例をいへば、牛・羊・豚・雞等の肉は、食料となり、牛・羊の乳は、飲料となり、羊毛は、毛織物の原料に、牛馬の皮と骨とは、器物を造るの原料となるが如し。故に、是等の動物を飼養するもの甚だ多し。其の業を牧畜といふ。

家畜を飼養するには、適當の土地を擇びて、善良の食料を與へ、其の小屋を清潔にして、疾病を豫防せざるべからず。我が國にても、近年、此の業漸く盛ならんとし、既に其のために、廣き野原を開きて、牧場とせしもの



もあり。

馬は、東山・西海の二道と、北海道とにて、多く牧養し、牛は、山陰・山陽の二道と、畿内の地方とにて、最も多く飼養す。豚は、琉球と臺灣とを以て第一とす。此の地方にては、家ごとに必ず數頭を飼養し、其の多少を以て、貧富を定むる風さへあり。臺灣にては、水牛をも盛に飼養して、耕作運輸の用に充つ。

第六　遠足

遠足は、年少き學生に取りては、これを試むること最も必要なり。讀書勤學は、決して怠るべからずと雖も、常に室内にのみ閉ぢ籠りては、身體虚弱に流れて、精神を不活潑ならしむるの恐れあり。故に、勉强の暇には、外出して遠足をなすべし。

遠足の區域は、甚だ廣くして、四季ともに其の興味あり。朋友うち連れて遠足し、野に出

で、林に入り、花を見、鳥を聞くことの樂しきが上に、事々物々に注意する時は、學問の助けとなることゝ、頗る多きものなり。

山岳相連なりて、其の間に谷川の流るゝを見れば、地理學の研究に益あるべく、草木の發生し、

凋落するを見、其の花を開き實を結ぶを見れば、理科の實驗ともなりぬべし。

また遠足のついでに、神社佛閣にまうで、或は有名なる名所古跡をたづね、歴史にて學び得たる所をまのあたりに見て、今昔の事どもを思ひ出づるは、學生にとりて、此の上もなき樂みならん。

凡そ書籍の上の研究のみにては、實地に適せざる事少からず。遠足は、即ち實地の學問

とも言ふべきものなり。

第七　手紙

旅立の人に送る文

京都御見物として近日御旅行遊ばさるべきのよし御出立は何日に相成候か就ては甚だ御面倒の儀に候へども御遊覧の御ついでを以て名所舊跡の寫真御買ひもとめ御歸國の節御持ち歸り下されたく御頼み申上げ候尚ほ御留守中御用も候はゞ御申付け下さるべく候

回返事

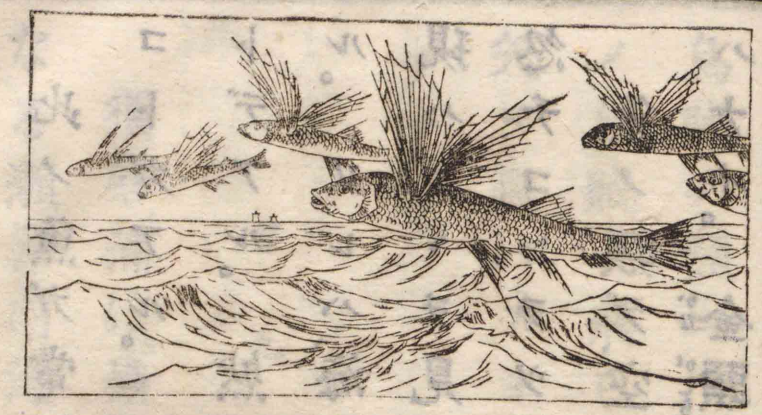
此の度京都見物に付御用向御申越し相成り承知仕り候巡覧の上然るべきもの見計らひ持ち歸り申すべく候

京都には七八日ばかり滞在致し市中の見物を終りついでに名高き比叡山にも

いぼりそれより大阪神戸須磨明石をも見物致したき心ぐみにて明後日出立の事に決し申候不在中は萬事御心づけ下されたく御依頼申上げ候草々

第八　飛魚

飛魚ノ飛ブノハ、頗ル見モノデアル。ソレハ、飛魚ガ、突然ト波間カラヲドリ出デテ、矢ヲ射ルヨーニ、空中ヲ飛ンデ、忽チ、又海中ニ飛ビ入ルノデアルガ、其ノアリサマガ、ナカナカ面白イ。



飛魚ハ、一尺バカリノ大サデ、ウロコノ色ハ青白ク、ヒレハ廣クテ、チョード、扇ノヨーナ形デアル。

其ノ飛バウトスルトキハ、マヅ、左右ノヒレデ、ハゲシク海面ヲタヽイテ、水ヲハナレ、ソシテ、一直線ニ低ク

飛ビ行クノデアル。

此ノ魚ガ、常ヨリモ高ク、空中ニ飛ビアガルコトガアル。コレハ、大魚ニ追ハレタ時ノコトデアル。然ルニ、空中ニモマタ、彼ノ敵ガアル。ソレハ、海鳥デアル。彼ハ、飛魚ガ、水上ニ現ハルヽヲ見ルト、電光ノ如クニ翔ケテ來テ、忽チコレヲツカミ去ル。

魚ノ類デ、空中ヲ飛ブモノハ、飛魚バカリデハナイ。金頭（いなだ）ノ一種ニモ、此ノ類ガアル。又、烏賊ノ類ニモ、空中ヲ飛ブモノガアルガ、數多ノ烏賊ノ飛ビ行クノハ、アタカモ、多クノ銀ノ矢ヲ飛バスヨーデ、頗ル美シク面白イ見モノデアル。

第九　須磨

須磨、浦は、攝津、國兵庫の西にあり。波穩かなる瀬戸内海に面して、松の生ひたる磯山、立ちつらなり、近くは、淡路、國に對し、遠くは、紀伊、

四國の山々をも眺むべし。砂白く、松青くして、その風景、畫にも、文にも、書き盡されず。

此の地は、一ノ谷に近く、源平の古戰場にして、平敦盛（タヒラノアツモリ）の墓は、今なほ須磨寺の邊にあり。古は、こゝに關所を置きたりしが、其のあとも、今に猶ほ殘れり。

須磨の浦わは　ほのぐと、
春のあけぼの　あけにけり、

青海原の　霧きえて、
のどかに見ゆる　ま帆かた帆。

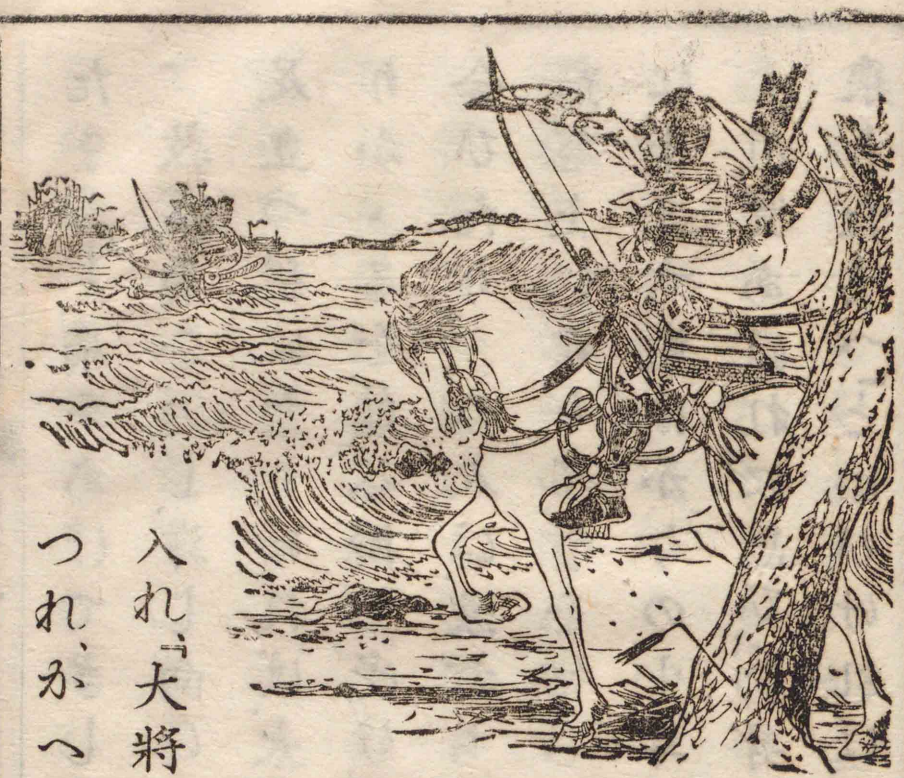
敦盛塚に　苔むして、
須磨の御寺は　ふりにけり、
いざもろともに　海士の子よ、
昔のあとを　弔はん。

沖のいさり火　影くらく、
鹽屋の烟　かすかなり、
夕涼しき　松原に、

月はさやけく　さし出でぬ。
武庫山おろし　うら寒く、
關屋たづぬる　人もなし、
沖路はるかに　なく千鳥、
淡路の島に　かよふらん。

第十　熊谷と敦盛

平家、一ノ谷の城を攻め落され、一門の人々、船に打ち乘りて、海上に漕ぎ出でぬ。此の時無官大夫敦盛は、人々におくれ、只、一騎、沖の船をめがけて、落ち行きけり。熊谷次郎直實、源氏の方よりこれを見て、馬を海にざぶと乘り入れ、「大將軍とこそ見たてまつれ、かへさせたまへ、返させ



たまへ』と、扇をあげてさしまねきけり。

敦盛、馬を返し、岸し向けておよがせけるが、足立つ程になりければ、太刀ぬきかざして、上りかゝるを、熊谷待ち受け、馬上にむずと組み合ひたり。二人は、波打ち際に落ちかさなり、熊谷上になりて、首を切らんと、内冑をのぞくに、十五六歳ばかりの少年なりき。

直實、あはれに思ひ、『御身は誰の御子にや、名乗りたまへ』と、いひければ、敦盛さらば、名乗って聞かするぞ、われは、經盛の末子無官大夫敦盛、生年十六なり、只、とく切れ』といふ。直實、さては、我が子小次郎と同年なり、かゝる若き人を殺さば、父母の悲み如何はかりぞ、助けばやと思ひしが、前にも後にも、みかたの兵は、おもひおもひに敵と組む。直實、しばし打ち案じ、『助け申さんとは存ずれど、源氏陸にみちて、とても遁れたまふことかなふまじ、御さいごの後は、あつくとむらひ申すべし』とて、涙を

流して首を切りぬ。

敦盛さいごの折にも、日頃手なれし笛を、錦の袋に入れて携へたり。熊谷これを見て、此の程、城の中に笛の音の聞えしは、此の人にてありけるか、平家の人々はなにとて、かくは、やさしきぞと、そゞろに哀れを催しけり。

第十一　天津城の攻撃 其の一

七月十三日、聯合軍、天津城を攻撃す。南面の攻撃にあたりしは、日・英・米・佛の聯合軍にして、曉まだほのぐらきに、白色帽の日本兵、花色帽・茶色帽の英兵・米兵・佛兵、雲霞のごとく南門におしよせ、土壁にすゑたる英軍の大砲は、同時に城門めがけてうち出したり。

我等は、午前七時頃、朝食をもすまさず、走り出でて、英軍の前を過ぎ、清兵の死體を飛びこえ飛びこえ、海光門の下に著きぬ。

門の傍には、我が負傷者を扱へる繃帶所あ

り。これは、あんぺらにて蔽へる四坪許りの場所にして、銃丸のために足をうたれて、跛ひける者、手をうたれて、腕をつれる者、顔をうたれて、繃帶の中より眼ばかり出せる者、或は負はれ、或は擔架にて來る者など、さまゞの負傷者、引きもきらざれば、軍醫は、息をつくいとまもなし。

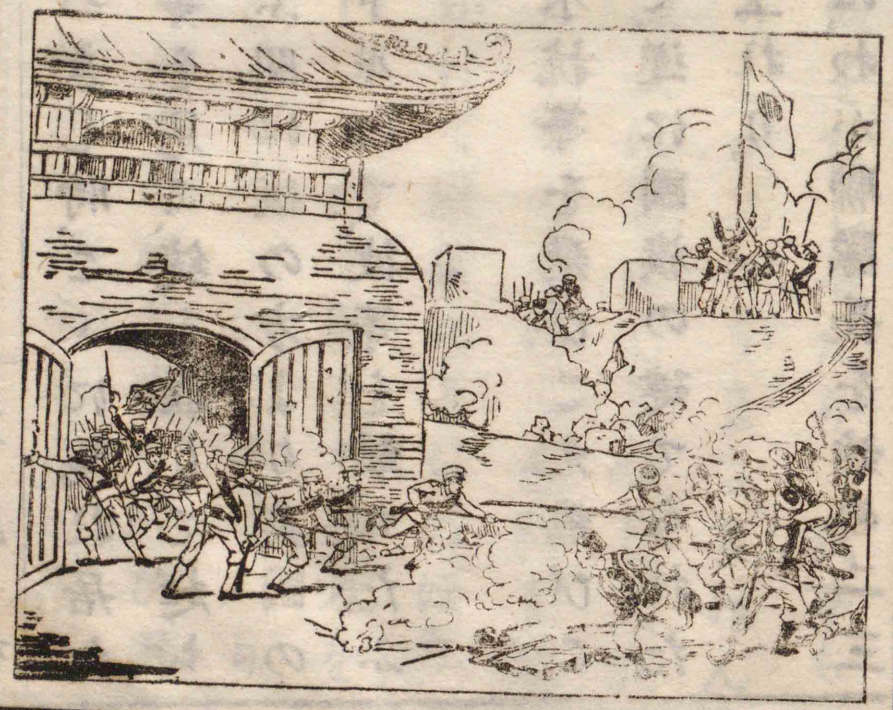
此の間、大砲・小銃の音たゆる間なく、忽ち一つの流丸、門のあたりへ飛び來りて、一時に從卒二人たふれたり。我等は走りて、門内に入り、雙眼鏡を出して戰況を望むに、我が日本兵は、あたかも、敵の目じるしとなれるもの〻如く、彈丸雨の如くうちかゝれり。されど、少しもたゆむけしきなく、兵糧をもつかはず、水をも飲まず、ますゝ奮戰して進みゆけり。

午後三四時頃には、敵勢次第に弱りゆきて、英軍のうち出す大砲の音、ますゝ烈しくなりぬ。

程なく、城内處々に黒烟起り、夕方には、我が兵、敵前四百メートルに押しよせ、夜の十時頃にいたり、日本兵、遂に南門を打ち破りて、攻め入りぬ。此の日の戰に、我が兵の死傷は、殆ど二百名なりと聞けり。

第十二　天津城の攻撃　其の二

十四日午前六時、我等が機器局の邊までかけつけし時は、既に、南門の上に、日本國旗のひるがへるを見たりければ、覺えず、同行の人とともに、萬歳をさけべり。いよいよ足を早めて、城の方へゆくに、途中には、人馬の死體横たはりて、目もあてられぬ有様なりき。



路傍の家屋に近づきし時、こゝに隠れ居たる敗兵ありしが、我等を見て、銃を取りて起ち上れり。すはと思ふ間に、後の方より、英國の騎兵かけ來り、ピストルにて、彼等を撃ちたふせり。

これより、死體・燒木杭等を飛びこえ飛びこえ、二重門をくゞりて、遂に國旗の建てられたる南門の城壁上に上れり。

此の時、城壁上には、わが聯隊長を始め、二三の將校集まりて、燒飯を食し居たり。我等も、燒飯の賜にあづかりしが、其のうまき言はんかたなかりき。聯隊長は、喜ばしき顏して、我等に向ひ、「とーとー日本軍の手にて、南門を破り、手早くはしごをかけて、城壁によぢのぼり、忽ち敵を追ひ拂ひ、内より門を開きて、身方を入れたり。英・米・佛の兵も、つゞいて走せ入りしが、皆聲をあはせて、日本帝國萬歳を叫び、君が代を吹奏せり。あれ、あの旗を見よ」と、指し

示さるゝを見れば、城内の中央に聳ゆる第一の高樓に、日本の國旗ひらゝとひるがへれり。我等、これを見たるときの愉快は、まことに譬へんに物なかりき。

（某從軍記者筆記參考）

第十三　赤十字社

赤十字社といへるは、軍人の、戰場にのぞみて、傷を被り、又は病に罹（カヽレ）れる者は、敵と身方との別なく、助くる組合にして、いづれの文明國にも、其の設けなきはなし。

其の起りを尋ぬるに、今より四十餘年前、英佛の兩國聯合して、露國を攻めし時、負傷者・病者、野山に充滿せ

しが、これを救ふの道なかりき。其の時、英國に、ナイチンゲールといへる貴女あり。これを聞きて、英佛兩國の許(ルシン)を請ひ、同志の婦人數十名と共に、はるぐ戰地に至りて、おびたゞしき患者(カンジヤ)を助けたり。これ、今日の赤十字社の基(モトイ)なりといふ。かよわき婦人の身を以て、かゝる大事業を企(クハダ)てしは、實に、人のかゞみにぞある。

かくて、程なく、また戰爭ありしに、瑞西國(スイセイ)のチューナントといへる人、親しく戰場にのぞみ、書を著はして、大に救助の必要を述べたり。

こゝにおいて、有志の人々、瑞西のゼネバ府に集まりて、一の救助組合を立てしに、文明諸國、次第にこれに加はり、遂に、各國に會社を設けて、萬國赤十字條約を結び、その本部をゼネバ府に置くに至れり。

我が國にては、明治十年の戰に、有志者が、博愛社といふを起して、官賊の別なく、患者を救

ひしに始まり、明治二十年に、博愛社を改めて、日本赤十字社と稱し、始めて、萬國赤十字組合に加はれり。それより、天皇・皇后兩陛下御保護の下に、其の事業、ます〳〵盛大となり、會員の數、日を逐ひて、増加せり。

第十四　怪我ノ手當

些細ノ怪我モ、手當ノ行キ屆カザルカ、或ハ手當ノオクレタルガタメニ、遂ニ一命ヲ落スモトトナリシ例多シ。サレバ、時ニノゾミテ施スベキ治療法ノアラマシヲ心得置クハ、人々ノ大切ナル務ナルベシ。

一、キリ傷、又ハ、ツキ傷。コレハ、及物・瀬戸物・硝子ノキレナドニテ、手足等ヲ傷ケ、出血シテ痛ム類ナリ。出血ノ多少ハ、傷ノ場處、及ビ其ノ大小ニヨリテ異ナリ。時ニハ、ソノ血ノ甚シクホトバシリ出ヅルコトアリ。カク烈シクホトバシルハ、最モ危キコトニシテ、直ニ

止メザレバ、命ヲ失フコト多シ。

故ニ、怪我アレバ、第一ニ血ヲ止ムルコト肝要ナリ。血ヲ止ムルニ、昔ハ、タモトクヅナドヲツケシガ、傷ニ不潔ノモノヲ觸ルヽハ、極メテ、危キモノニテ、カヘッテ、ウミヲモチ、又ハ破傷風トイヘル、恐ロシキ病ヲ發スルコトアルモノナレバ、必ズ避ケザルベカラズ。

手足ノ傷ハ、マヅ、コレヲ、冷水或ハ石炭酸ニテ、清潔ニ洗フベシ。ワヅカノ出血ハ、直ニ、止マルベシ。モシ、止マラザレバ、傷ノ上部ヲ、清潔ナル手拭ニテ、堅クシバリ置キテ、醫師ヲ招クベシ。

又、頭ノ傷ハ、毛ヲ剃リテ、前ノ如ク、ヨク洗ヒ清メタル後、清キ綿ヲオシツケ、繃帶ニテ卷クベシ。

二、打傷オヨビ火傷。打傷ノ輕キモノハ、冷水、又ハ、氷ニテ冷サバ、自然ニ癒ユベシ。火傷ニハ、直ニ油ヲヌルヲヨシトス。其ノ重キ

モノハ、イヅレモ、直ニ、醫療ヲ受クベシ。

第十五　手紙

看病見舞の文

御祖父様には不意の御怪我にて御入院なされ候よし今日學校にて承り驚き入り候其の後の御模様は如何に候か伺ひ上げ候傷は普通の病とちがひ最初の療治だにすみ候はゞ日々薄紙をはぐが如

くに見る〳〵平癒致すものと承り候へ、ばあまり御心配なき方宜しからんと存じ候たゞ御病人のいつも樂しく面白く感ぜらるゝ樣御介抱肝要に御座候

此の日清戰史は先日東京より取りよせ候ものにて事の面白く勇ましきのみならず文もたやすくして私共にもよく分り申候御病人に御讀み聞かせ相成り候はゞ何程か御氣慰めにも成るべきかと

存じ御見舞として進上仕り候以上

第十六　河の力

諸子は、嘗て洪水を見しことあるか。水勢蕩々として、堤を破り、家を流し、田野を沈め、人畜を溺らす、其の凄しさ恐ろしさ、眞に言語につくしがたし。人は、これを見て、始めて河の力の恐るべきことを知る。然れども、河は、平時に於ても、徐々に驚くべき大なる仕事を行ひつゝあるなり。

河は、其の源を發してより、一秒も休まず、一分も息はず、徐々に、山を崩し、岸を嚙み、流れ流れて、土砂を海に運び行く。かくて、下流にいたりて、水勢靜になれば、土砂は、其處に堆積するが故に、河底は、次第に埋められて、數十年の後には、平地よりも遙に高くなること、珍らしからず。

大抵河の口には、土砂堆積して、新陸地をつ

くる。其の形、多くは三角なり。これを三角洲といふ。世界の大都にして、此の三角洲の上に建てられたるもの、甚だ少からず。我が國にても、大阪は、淀川の三角洲に建てられたる都會にして、桑名は、木曾川の三角洲に建てられたる市街なり。

河は、また風の方向、潮の力によりて、三角形にあらざる新陸地をつくることあり。三景の一なる天橋立の如き、北海道に多き潟の如きは、即ちこれなり。

荒るゝ時は、桑田を海に變じ、靜なる時は、河口に都會をつくる。河の力は、實に驚くべきものならずや。

第十七　雨の惠

數日、雨降りつゞきて、川水溢れ出でんほどになるときは、雨もいとふべきものなれども、また、これなくては、人生を保ち難し。

井水のわき出でて、我等の飲料となり、河水の流盡きずして、灌漑・運漕の利あるも、其の源をたづぬれば、皆雨より來るなり。山林の樹木、田畑の穀物・野菜も、其の生長を遂ぐるは、雨の力によること多し。また、市街の砂ほこりにけがされたる空氣は、雨によりて新鮮となり、道路の塵芥は、雨の爲めにおし流され、夏のたへがたき暑さは、夕立の雨に洗はれて、涼しくなる。

もし、我等が住める土地に、絶えて降雨なかりしならば、井水・河水は、いつしか盡き、草木は、枯れはて、人畜の生命をたもつこと難からん。」

かく、草木・人畜の生活に必要なる雨は、何より起るか。これは、太陽の爲めに、地上より蒸し上げられたる水分より起るなり。蒸し上げられたる水分は、目に見えぬ水蒸氣となりて、空際に昇り、寒さにあひて收縮し、細かき水滴となりて浮遊す。これを雲と名づく。此

の雲を成せる細かき水滴、互に相合して、次第に大なる水滴となり、遂に地上に降る。これを雨と名づくるなり。

海は、天然の蒸溜器にして、絶えず水蒸氣を作るものなれども、其の水蒸氣を收縮せしむるものは、陸地なり。故に、雨は、海上に少く、海に近き陸地に多し。我が國は、四方に海をひかへたる島國なるが故に、降雨の量頗る多し。

第十八　汽車

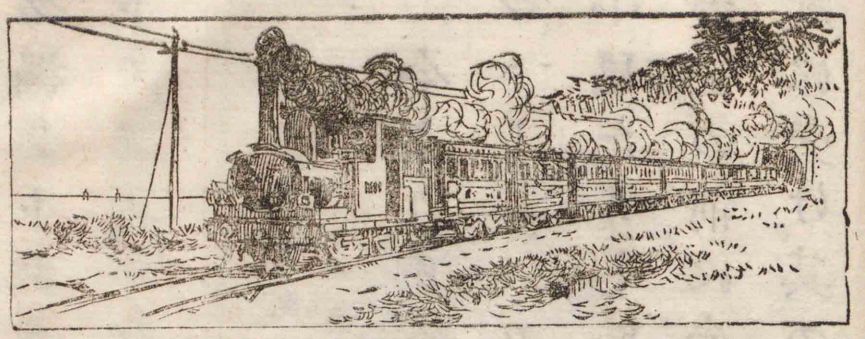
汽車ハ、蒸氣ノ力デ進行スル車デアル。其ノ道ヲ鐵道ト云フ。鐵道ハ、道ノ上ニ枕木ヲ横タヘテ、其ノ上ニ、二スヂノ鐵ヲ長ク敷キトホシタモノデアル。

汽車ノ走ルノハ、甚ダ速カナモノデ、車内ニ居テ、窓ノ外ヲ見ルト、道ノ左右ニアル人家モ、樹木モ、皆アトノ方ヘカケ行クヨーニ見エル。

旅客ヲ載セル車ハ、客車デ、其ノ大キイノハ、

一車ニ、百數十人モ載セル。物品ヲ載セル車ハ、貨車デ、牛馬ナドモ、皆コノ貨車デ運バレル」。

蒸氣機關ヲソナヘタル車ハ、機關車ト云ッテ、コヽデ石炭ヲタイテ、蒸氣ノ力ヲ働カセルノデアル。客車・貨車ナドガ、幾臺モツナガッタ列車ハ、コノ機關車ニ引カレテ、進行スルノデアル。汽車ノ發著スル所ヲ、停車場ト云フ。マタ、コレヲ、英語デ、すてーしょんト云フモノモアル。



汽車ガ、山ノ半腹ナドノ、クライ穴ヲトホリヌケルコトガアル。コノ穴ヲとんねるト云フ。とんねるノ内部ハ、石カ、煉瓦デ、積ンデアルカラ、容易ニ壞ルヽヨーナコトハナイ。

市街ノ上ニ、高ク橋ヲカケテ、鐵道ヲツクルコトモアル。コレヲ高架鐵道ト云フ。又、地中

ヲ掘リトホシテ、市街ノ下ニ鐵道ヲツクルコトモアル。　コレハ、地下鐵道ト云フノデアル。

第十九　蒸氣機械の發明者

今より凡そ百五十年の前にあたり、英國に、ジェームス・ワットといふ人ありき。　此の人、小兒たりし時は、伯母の家に養はれしが、日々湯釜の前に坐して、釜より噴き出せる蒸氣を匙に受け、其の點滴を數へて、深く考慮を費したり。　伯母は、此の小兒を愚物なりと思ひ居たれば、これを見れども、何の爲めにかかる事を爲すかと、問ひ明らめもせで、只、其の爲すまゝに任せたりき。　然るに、此の些々たる經驗こそ、後日に至りて、大發明

を爲すの基礎とはなり、けるなれ。

ワット十八歳に至り、數學器械の製造法を學びしが、忽ち其の業に上達して、グラスゴー大學の器械師に擧げられき。或る日、大學にて、蒸氣機械を修繕しけるをり、ふと其の改良を思ひ立ち、これより數年の間、種々考案をこらして、遂に其の目的を遂げたり。後、此の改良蒸氣機械は、諸種の工業に應用せられしより、ワットは、蒸氣機械の發明者と稱せられき。

かくて後、此の機械を基として、汽船も造られ、汽車も創められたり。ワットの世を益せし功績は、實に大なりといふべし。

第二十　大名と鎧師

或る大名、射術に長じて、上手の譽ありき。或る日、上手と呼ばれたる鎧師を召して、「汝が造る鎧は、すぐれて丈夫なりと聞きたるが、強弓の矢さきには、堪へざるべし」と云へり。

鎧師うち笑ひて、『拙者がつくりたる鎧、いかなる強弓の矢にあふとも、うらかく事候はず』と、答へたり。

大名は、『さらば、我、強弓にて試みん、汝、我が矢先に立ちて、一矢受くるか』と問ひぬ。鎧師、『心得て候、胴なり、袖なり、思ふ所を射たまへ』とて、己が造りたる鎧を著て、矢さきに立てり。大名は、弓に矢つがひ、満月のごとくに引きしぼり、切って放てば、誤たず、胴のたゞ中射たりしかど、矢は、はね返りて、四五間ばかり後へ飛びたりけり。

此の時、大名は、二の矢を取りて、『背を向けよ、背を射ん』と言ひければ、鎧師は、急ぎ之を止めて、『拙者が鎧は、臆病武士

のためにつくらねば、背の射ためしは、御免あれよ」と答へたりとぞ。

第二十一　刀劍

我が國にて、刀劍をきたふ業は、古くより開けて、有名の刀工も、多く出でたり。太古に於ても、既に叢雲劍（ムラクモノツルギ）あり。降りて、文武天皇の御代には、大和に天國（アマクニ）といへる名高き刀工出で、一條天皇の御代には、京都に三條小鍛冶（コカジ）といへる名人出でたり。

後鳥羽天皇は、武藝に御心を寄せさせたまひしより、諸國の名工を宮中に召して、刀をつくらしめ給ひ、御みづからも、きたひ給へり。刀に、菊花の御紋章をきざみ付けた

まひしを以て、世にこれを菊の御作と稱せり。」

其の後、鎌倉に、岡崎正宗といへる名工出でしが、其の技の精巧なること、古今これに及ぶものなかりき。　また、備前には、古より、有名の刀工多く出でたり。

今よりおよそ三百餘年前にあたり、世は、戰國となりて、信玄・謙信・信長・秀吉等の豪傑、四方におこり、戰爭絶ゆることなかりければ、農工商の人々も、大小二刀を帶ぶることゝなり、刀劍製造の業は、いよ〳〵盛になれり。

古の名工は、職業を重んじ、名譽を貴びければ、必ず物いみをなし、身をあらひ清めたる後に、刀の鍛錬にかゝり、一刀をきたひ上ぐるに、數月を費したりといふ。　其の名刀を製し得たりしも、誠にゆゑある事といふべし。

第二十二　市町村

人ノ一家内ニハ、親子アリ、兄弟アリ。　親ハ、

子ヲイツクシミ、子ハ親ニツカヘテ、孝行ヲツクシ、兄ハ弟ヲ愛シ、弟ハ兄ニ從フ。此ノ親子兄弟等ヲ家族ト云フ。

又、人ニハ、親族朋友アリ、此ノ親族朋友モ、マタ、各、其ノ家族アリ。此ノ家族ト、彼ノ家族ト、タガヒニ往來シテ、心安クツキ合ヒ、相共ニ一家族ノ如キ思ヲ爲ス。

カヽル家族ノ住居、コヽニ五六戸、カシコニ七八戸ト散在シテ、其ノ數ヤヽ多キニ至レバ、コレヲ村又ハ町ト名ヅク。

町ハ、村ニクラブレバ、戸數モ多ク、軒並モトトノヒタルトコロナリ。町ヨリ戸數多クシテ、商工業ノ繁昌スル所ヲ市ト稱ス。市ノ最モ大ナルハ、東京ニシテ、大阪・京都コレニ次ゲリ。此ノ三市ハ、其ノ市内ヲ、數區ニ分チタリ。

市ニ市長、町ニ町長、村ニ村長アリテ、其ノ市町村ノ事務ヲツカサドル。市ノ下ニ區アル所ニハ、市長ノ下ニ區長アリ。

市町村ニ居住スルモノヲ、其ノ住民ト云ヒ、成年ノ男子ニシテ、二年以上、其ノ市町村ニ居住シ、租税ヲ納メ、公費ヲ出スモノヲ、公民ト稱ス。市ニアリテハ、市公民ト云ヒ、町村ニアリテハ、町村公民ト云フ。

北海道・沖縄及ビ臺灣ヲ除キテ、町ノ數ハ、九百以上、村ノ數ハ、一萬二千四百以上市ノ數ハ、五十餘アリ。

市ノ人口ハ、凡ソ二萬以上ニシテ、東京ハ、人口百四十萬ニ及ビ、全國中ニテ、最モ人口多キ市ナリ。

第二十三　歌

日本刀

あゝ日本刀、　日本刀、
遠き神代のむかしより、
きたひにきたひて日の本の、
やまと心をみがきつゝ、

光を世界にはなつなり。

あゝ日本刀、日本刀、
三種の神器の一つなる、
かの叢雲（ムラクモ）の御劍（ミツルギ）は、
燒津（ヤイヅ）の難にしこ草を、
なぎはらはせりあともなく。

あゝ日本刀、日本刀、
今の軍（イクサ）はおしなべて、
大砲（オホツツ）小銃（コツツ）を用ふれど、
劍の光はくもりなく、
烟の中にきらめけり。

あゝ日本刀、日本刀、
すゝめやすゝめとくすゝめ、
軍は勝てりとくすゝめ、
指揮する劍のきっさきに、
誰か刄向ふものあらん。

あゝ日本刀、日本刀、
やまと心ともろともに、

朝な夕なにとぎみがき、
我が日の本の大御稜威、
宇宙にあまねく輝かせ。

實業補習讀本卷二終

明治三十五年四月十七日印刷
明治三十五年四月二十日發行

實業補習讀本　全六冊
定價
卷一、二、各金貳拾錢
卷三、四、五　金貳拾貳錢
卷六　金貳拾參錢

文學社編輯所編纂

著作權
登錄濟

發行兼印刷者　東京市日本橋區本町四丁目十六番地　小林義則

發兌　東京市日本橋區本町四丁目十六番地　文學社

印刷所　東京市神田區錦町三丁目一番地　文學社工場

田尾小兵衛